

# ショートムービーによる情報記録の有用性に関する研究

松下 慶大<sup>\*1</sup> 長 幾朗<sup>\*2</sup> 学籍番号 : 5116E020-2

## A Research on Usefulness of Information Recording with Short Videos

Keita Matsushita<sup>\*1</sup>, Ikuro Cho<sup>\*2</sup>

概要 - 本研究は、社内で行われている情報共有の方法に主眼を置いたものである。また、一般的なテキストを用いた情報記録・方法共有の課題を解決することを目的とし、それを実現するショートムービーによる情報記録ツールを提案し、その有用性を評価した。テキストによる情報共有の方法は、書き手・読み手の双方において負荷が大きく、また文章のみで情報を理解することは難しいケースがある。そこで本研究ではショートムービーを用いた情報記録の方法を試みた。複数の短い時間の動画を1つのコンテンツとしてまとめて記録するツールを提案し、テキストを用いた方法との比較実験を行った。その結果、ショートムービーを用いた情報記録では、より理解しやすいコンテンツの作成を実現し、テキストによる情報記録に比べ書き手・読み手の負荷を軽減する結果を得た。

キーワード: 情報記録、情報共有、ショートムービー

Keywords: Information Recording, Information Sharing, Short Videos

### 1. テキストによる情報共有の課題

一般的に社内で行われる情報共有の方法はテキストを用いたものである。しかし、テキストを用いた情報記録の方法には、情報を共有する立場の書き手と情報を受取る立場の読み手の双方にとって大きな負荷があると言える。書き手においては、自分の行っている作業を言語化し相手に解りやすく伝える必要がある。この作業は一般的に難しく個人の能力に依存する。また、読み手においては、文章を解釈し理解することは、視覚的に理解するよりも負荷が大きい。特にサービス開発やデザインなどの動作確認が必要な環境では文章のみで情報共有することは難しい。以上のことから、企業におけるテキストを用いた情報共有の方法は、書き手・読み手の双方にとって負荷が大きいと言える。そこで本研究では、企業における情報記録をより理解しやすいものに、且つ読み手・書き手の負荷を軽減したものにすることを主目的とする。

### 2. 情報共有ツールに求められるもの

現状のテキストを用いた情報共有の方法は読み手・書き手の双方にとって負荷が大きいと記した。そのため、共有の手軽さと共有物に対する理解のしやすさは情報共有ツールに求められるものとして大きい。また、その他の要素としてはリアルタイム

性と非対面性が挙げられる。近年、グローバル化やリモートワークの広がりにより、対面している状態の作業環境から物理的に離れている非対面の作業環境が主流となってくるだろう。このような分散型オフィスでは、インターネットを用いたコミュニケーションツールが必要不可欠となる。以上から、情報共有ツールに求められるものとして、1) 書き手・読み手の負荷の軽減、2) コンテンツの理解のしやすさ、3) 分散型オフィスを考慮したコミュニケーションの質の向上があげられる。

### 3. 動画を応用した表現方法

情報共有ツールとして、書き手・読み手の負荷を軽減するために動画を使った方法を試みた。動画の大きな特徴として視覚的に解釈することが挙げられるが、これは読み手において文章から情報を理解することよりも負荷が少ないと言える。また、近年 SNS を中心に動画を応用した新しい表現方法が登場してきている。Instagram の Story では、ユーザが撮影した複数の短い時間の動画を1つのコンテンツとして閲覧することができる。これによりユーザの1日の情報が短い時間で効率よく把握することができる。また、レシピの新しい形として早回しの料理動画が登場している。料理の工程を動画におさめ、早回しで再生することで、30秒ほどで1つの料理のレシピを把握することができる。このよ

うに、短い動画を連続して再生する方法や早回しをする方法によって、時間的に効率よく情報を把握することができる。以上から、動画による情報共有はテキストによるものと比べ、効率よく情報共有を行えることができ、書き手・読み手の双方にとっても負荷が少ないと言える。

#### 4. ショートムービーによる情報共有ツールの提案

本研究では情報共有のツールとして、ショートムービーを使った方法を試みた。短い時間の動画を複数撮影し、それを1つのコンテンツにまとめたものを意味する。この複数のショートムービーによって構成されたコンテンツを記録するツールを提案し、その有用性を検証した。このツールはチーム内で使用することを想定し、ツール内ではチームメンバーにショートムービーによるコンテンツを共有することができる。ユーザはプロジェクトを作ることができ、ユーザはプロジェクト内に動画を追加することができ、複数の動画を撮影した場合、それらが時系列で連結され、再生される使用となっている。

#### 5. ツールの評価実験

提案したツールの有用性を評価するために、以下の1) 手順説明の記録・共有実験、2) 議論の要点を記録・共有実験の2つを行った。手順説明とは、作業の手順を説明する説明者、説明をもとに作業を実行する実行者の2者の視点で評価を行う。また、議論を記録する実験では、3人グループで議論をしてもらい、その過程で発生した決定事項や、重要項目など記録・共有したいものをツールによって記録するというものである。この実験においても、議論を実際に行った当事者という視点と、議論に参加していない第三者にコンテンツを共有した場合の第三者の視点という2つの視点で評価を行った。どちらの実験も、コンテンツ作成・解釈の負荷を測定するために、それらの作業に費やした時間を測り、テキストのみの情報記録との比較実験を行った。また、コンテンツの分かりやすさという面では、被験者にアンケートを採ることで定性的に評価した。

#### 6. 実験結果と考察

手順説明の記録・共有実験では、説明者・実行者がコンテンツを作成・解釈するために費やした時間はそれぞれ約1分短くなった。また定性的な評価により、ツールを用いた情報記録はテキストによるものに比べ、より分かりやすいコンテンツの作成を

現することができたことが分かった。また、議論の要点を記録・共有実験では、当事者に対して、ショートムービーによる記録は議論の議事録として十分に機能することがわかり、第3者に共有するためのコンテンツとしてもテキストによる議事録に比べ有効的という結果を得られた。

#### 7. 結論

本研究では、現状一般的であるテキストを使った情報共有・情報共有の課題に着目し、コンテンツの分かりやすさとコンテンツの作り手・読み手の負荷という2つの点を改善することを目的とした情報記録ツールの提案を行った。これは短時間連続動画による情報記録方法であり、本研究の目的はこのツールの有用性を評価することであった。評価実験から、手順説明の記録・共有という場と、議論の要点を記録・共有するという場の2つの環境において、有効であると言える結果を得られた。記録した場面毎にショートムービーで記録し、複数のショートムービーを時系列で連結させることで、重要な点のみを効率的に共有することができることが示された。

#### 参考文献

- 1) 村永哲郎、守安隆：グループウェアの実現に向けて - グループワークのための情報共有技術、情報処理学会、Vol. 34 No. 8 pp. 1006-1016 (1993)
- 2) 本田ら：作業者の集中度に応じた在宅金労務環境の提供仮想オフィスシステムValentine、情報処理学会論文誌、Vol. 39 No5 (1998)
- 3) 石井：グループウェア技術の研究動向、情報処理学会、Vol. 30、No. 12 (1989)
- 4) 亀和田ら：Traveling Cafe：分散型オフィス環境におけるコミュニケーション促進支援システム、インタラクション、pp. 227-228 (2006)
- 5) 伊藤ら：非同期環境におけるコミュニケーションを触発する実世界志向らくがきメディアの構築と評価、情報処理学会 (2005)
- 6) 宮田ら：会議を撮影した動画メディアの思考状態をインデキシングの提案、情報処理学会、Vol. 45 No. 11 (2004)
- 7) 友部ら：ディスカッションマイニング：議事録集合から知識発見、情報処理学会第67回全国大会

